

- 岩 政 定 治 (1943) 台湾・次高山の植物概観, 博物学会誌 11:21-28
- 金 平 亮 三 (1936) 台湾樹木誌, 養賢堂.
- 工 藤 祐 舜 (1933) 台湾の植物, 岩波書店.
- 森 邦 彦 (1937) 次高山, 山荘付近のニイタカトドマツ (*Abies kawakamii* Ito) 林の下草の植物群落的研究, 植物及動物 6:1550-1560, 1696-1702.
- 中 西 哲 (1964) 植物調査報告, 1963年神戸大学台湾山岳学術調査隊報告書 PP: 31-48.
- 鈴木 時 夫 (1938) 中央尖山の植被概観, 日本生物地理学会報 8:177-195.
- 鈴木 時 夫・福 山 伯 明・島 田 秀太郎 (1939) 台湾の高山植物群落に就て, 日本生物地理学会報 9:99-131.
- 鈴木 時 夫 (1952) 東亜の森林植生, 古今書院.

## 長野県内の植生図

和 田 清

K. Wada: Vegetation maps in Nagano Prefecture

### I 植生図作製の立場

信州植物生態研究グループが長野県の植生(地)図をえがこうととりくんでから、既に、10年余を経ている。当初は簡単に、長野県内の植物分布を大まかな群落単位で図化したいという程度で出発している。そもそも、地質図に匹敵するものを作製したいという単純なことがらであった。その後、各地で本格的な植物社会学的な観点に立つての植生図が作製され、長野県の植生図も、どうか発表の段階に至っている。

植生図作製の意義については、宮脇(1967ほか)らによって急速に普及され、特に、日本生態学会上田大会(1968)には、シンポジウムまで開かれて来ている。それらをまとめると、

- (1) 科学的な研究、特に植物社会学的な考究
- (2) その上にたつた応用生態学として、自然保護、土地利用等のための立地診断の基礎資料に重点が置かれている。

長野植研. 4号, 1971年4月

Bull. Bot. Soc. Nagano No.4, Apr. 1971

## Ⅰ 県内の植生図作製の歩み

長野県内の植生、群落配分の主なものを拾うと、小泉(1932)は大正年間の調査による千曲山脈高地帯植物分布図、南アルプスの現在植物分布図と題して着色図で表わしている。また、長野営林局では、各地の営林署の資料から林相図として、県内全域にわたってまとめている。前田(1958)は御岳研究の中に「御岳の植生分布図」をかかげている。

近年になつては、平林・山崎(1959)は北アルプス針ノ木岳を中心とし、和田(1964)は志賀高原の植生図をえがいているが、これらはいずれも、相観による植生図であつて、植物社会学的な裏づけはない。その後、宮脇博士の指導による植生単位づけが試みられ、植生誌とした各地の現存植生図が報告されている。それらの主なものをかかげると、宮脇・大場(1963)の南アルプス(着色)、宮脇・大場・奥田(1969)の乗鞍岳(着色)、清水・中山(1968)の更埴地方(着色)、平林・中山ら(1967)の黒姫山の山頂周辺、和田・中山ら(1969)の苗場山の山頂部(着色)、浅野・中山ら(1969)の菅平の湿性林(着色)、小林ら(1970)の奥志賀高原、伊藤・小林(1969)の地獄谷周辺、横内・小林ら(1970)の大峰・旭山、和田ら(1970)の戸隠高原(着色)、平林・中山ら(1969)の蓼科山周辺、平林・八幡(1969)の樽池周辺、中山・堤(1969)の茶白山、中山・堤ら(1970)の摺古木山、伊藤・和田ら(1970)の乗鞍岳山麓などがある。

一方、動物特に鳥類の棲息域として植生分布との関連を論じているのは、羽田・平林ら(1964)の爺ヶ岳のライチョウ、羽田・山崎ら(1965)の飯縄山のライチョウ、羽田・平林ら(1967)の火打岳のライチョウ、更に、せまい棲息域の植生については、鳥類グループの一連の報告の中に見ることができる。

これらと並行して作業が進められているのが、前述した植生グループによる県全域の植生図の集大成である。

## Ⅱ 植生図作製の問題点

上記の資料をもとに、北信地方の植生分布を模式化したものが別図である。(次頁)

長野県の周辺部の山岳地帯は自然植生がそのまま残存するので、その実態は比較的とらえやすく、ほぼ全容が明らかにされつつある。しかし、多くを占める中央部は、既に、代償植生と化しているので原植生、或は、潜在自然植生については全く手がつけられていないという現状である。特に、海拔700m以下は、永年にわたって人間の生活域として手が加えられ、その変容ぶりは著しい。特に、開発等で土地利用計画が早急に必要な立地でもあるから、今後漸次明らかにされていかねばならない地域である。

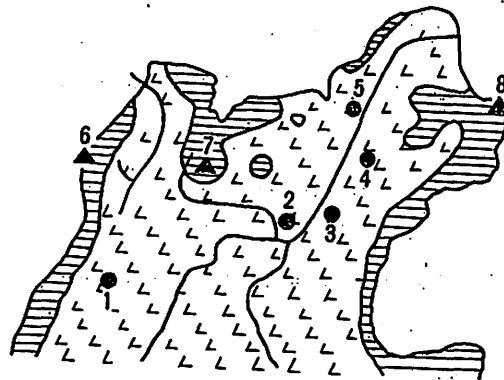
潜在自然植生図については、今後の研究にまたねばならないが、戸隠高原で試みられた一部を次

にかかげる。

戸隠山周辺は、海拔1800mを境とし、上部はコケモートウヒクラス域である。下部はミズナラ・ブナクラス域に包含され、1200m～1300mに広がるいわゆる高原帯は、伐跡放置、カラマツ植林、牧場等の代償植生となっている。これらの立地で、植物社会学的な立場から調査検討された結果が別表である。

火山灰層を主とした堆積土の深い立地はブナ林を形成し、伐採された後も復元可能である。湖底堆積層におおわれている低地は、ハ

ルニレ群団域に含まれ、カラマツの植林も成立しがたい不成績造林地をつくり出している。よってこれらの立地は伐採等による自然の破壊は、極力さけ、復元はハルニレ群団域の構成種をあてることが最も望ましいことになる。



- 人間の手が比較的是っていない地域(自然植生)  
 何らかの形で人為が加わっている地域(代償植生)

- 1 大町市 ●2 長野市 ●3 須坂市 ●4 中野市  
 ●5 飯山市 ▲6 白鳥岳 ▲7 戸隠山 ▲8 苗場山

北信地方の植生概念図

#### 伐跡放置場所における植生概観

| クラス・オーダー      | ミズナラ・ブナ                                                   |                           |
|---------------|-----------------------------------------------------------|---------------------------|
| 群 団           | ハ ル ニ レ                                                   |                           |
| 群落および<br>下位単位 | オオバザサ                                                     | アブラガヤ群落                   |
|               | 1. 典型 亜 群 落<br>2. クマイチゴ亜群落<br>a ヤナギラン<br>b 典 型<br>c ヤマヨモギ | 1. ツボスミレ亜群落<br>2. タニヘゴ亜群落 |
| 潜在自然植生        | マルバゴマギーハルニレ群集                                             | ハンノキ・ヤチダモ群集               |

このように、潜在自然植生図はその立地が現時点で支え得る能力を表わしていることになる。

長野県内の植生図に関する文献(1)

- 浅野一男ほか(1969) 菅平湿原の植物生態 I 植物社会, 菅平研報 3, 11~28.
- 羽田健三・伊藤静夫・小林規甫(1971) 地獄谷周辺の植生(印刷中)
- 小泉秀雄(1932) 保護すべき千曲山脈の遺存寒地帯, 史蹟名勝天然記念物調査報告 1~5, 429~581.
- 小泉秀雄(1932) 日本南アルプスの遺存寒地帯, 同上 6~10, 20~209
- 羽田健三・小林圭介・平林国男(1970) 奥志賀高原の植生, 下高井郡山ノ内町観光開発調査報告書.
- 信州植物生態研究グループ(1966) 長野県における植生の研究, 13回日生態大阪大会要旨.
- 信州植物生態研究グループ(1968) 長野県的主要自然植生, 15回日生態上田大会要旨.
- 中山 冽(1968): 更埴地方相観植生図について, 更埴地方誌自然編 615~616
- 羽田健三・中山冽・平林国男(1967) 黒姫山における植物社会学的研究, 志賀自然教育研究施設研究業績 6, 35~48.
- 羽田健三・中山冽・堤久 茶臼山の植生(印刷中)
- 羽田健三・中山冽・堤久・浅原協 摺古木山の植生(印刷中)
- 羽田健三・平林国男・和田清(1964) 爺ヶ岳におけるライチョウの生活場所と植生との関連 長野林友 10, 2~20.
- 羽田健三・山崎惇・和田清ほか(1965) 飯縄山におけるライチョウと植生, 志賀高原生物研究所研究業績 4, 35~44.
- 羽田健三・植木久米雄・平林国男・中山冽(1967) 火打山のライチョウ, 志賀自然教育研究施設研究業績 6, 49~60.
- 平林国男・山崎惇(1959) 針ノ木岳周辺における代表的植物群落の解析, 針ノ木岳, 自然と保護 97~114
- 羽田健三・平林国男・中山冽(1969) 蓼科山における植物社会学的研究, 蓼科山の植生及びその保護と利用についての報告書 1~22.
- 羽田健三・平林国男・八幡泰平(1971) 梶池の植生(印刷中)
- 前田 禎三(1958) 木曾御岳の植物群落, 御岳研究自然編 599~609.
- 宮脇昭・大場達之(1963) 南アルプス植生調査報告, 日本自然保護協会学術報告書 4, 56~67.
- 宮脇昭・大場達之・奥田重俊(1969) 乗鞍岳の植生, 日本自然保護協会調査報告 36,

羽田健三・横内文人・小林圭介・若林文子(1970) 大峰山・旭山の植生, 千曲川下流観光資源開発調査報告書 59~69.

和田 清 (1964) 志賀高原の植物相と植物群落(1)植生概観, 志賀高原生物研究所研究業績3, 27~33.

羽田健三・和田清・中山冽・北村智恵・関節子(1969) 苗場山頂湿原を主とした植物社会学的研究, 千曲川下流観光資源開発調査報告書 1~37.

和田 清 (1970) 飯縄山のライチョウ, 上水内郡誌自然編 792~800.

羽田健三・和田清・小林圭介・浅原協(1970) 戸隠高原の植生, 千曲川下流観光資源開発調査報告書 2~26.

和田 清 (1970) 長野県の植生ととりくんで, 日本の屋根 11(10), 20~21.

## 松本盆地にシラゲガヤの大繁殖

浅 川 富 雄

T. Asakawa: Occurrence of *Holcus lanatus* in Matsumoto Basin

### 1. 帰化植物シラゲガヤ

シラゲガヤ *Holcus lanatus* (イネ科)は、すでに松本盆地に入りこんだ帰化植物としては古いものに属する。南安郡誌にも、東筑松本誌にものもっているのに、今から20年以上前と想像されるが、今までに余り注目されていなかったものである。

その形態は、草丈数十cm、根元で分枝して叢生する。下部は節で屈曲するが、上部は直立する。茎葉は白緑色、とくに茎に白毛が多い。(立毛であるが、やや逆向きである。)穂も緑白色であるが、穂先はいく分紫色を帯びる。穂も茎も軽く柔い感じのする植物で、他のイネ科植物との区別は比較的容易である。多年生の草本。欧州原産。写真4参照。

### 2. 松本盆地のシラゲガヤ大繁殖とその調査

この植物は、今から3年前(昭和43年)までは、松本市街の西から豊科方面へかけて、そのうち特に奈良井川流域近くに多かった外、他には余り見かけなかったものである。例えば、松本から

長野植研. 4号. 1971年4月

Bull. Bot. Soc. Nagano, No.4, Apr. 1971